



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	共感する我：メヌ・ド・ピランの心理学と道德の基礎についての試論〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	長坂, 祥悟
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第16490号
Issue Date	2025-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94951
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Shogo_Nagasaka_abstract.pdf, 論文内容の要旨



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 長 坂 祥 悟

学位論文題名

共感する我—メヌ・ド・ビランの心理学と道德の基礎についての試論

本論文の観点と方法

本論文は、フランス革命期に活躍した哲学者メヌ・ド・ビランの道德哲学を、「共感」の概念を鍵として再構成し、その意義を論ずるものである。ビランの後期道德哲学に関する研究は世界的に見ても多くはなく、日本語での先行研究はほとんど存在しない状況にある。本論文は、「心理学」として特徴づけられるビランの中期哲学においては未解決であった課題を明確にし、彼の後期道德哲学を、この課題のためのものとして捉える。

この課題とは、とりわけ自我と他者の関係性をいかに説明するか、というものであった。ビランは中期の「心理学」において、「原初的事実」などの概念を用いながら、自我の実存を告げる経験を内的な意志の感知として捉えた。ところが、このように捉えられる自我が如何にして他者と関係を有し、社会的な存在たりうるかは、彼のこの「心理学」においては十分説明されておらず、ビラン自身もこの課題を自覚していた。つまり彼の道德哲学は、「心理学」の課題によって要請されたものであり、自我が如何にして他者と交流し、かつ社会の中で道德的な存在となるかを論じる理論である。それゆえに、論者は彼の道德哲学を独立して分析するのではなく、常に彼の「心理学」との関連の下で考察する。本論文では、『心理学の基礎についての試論』（1812）をはじめとした中期哲学の諸著作と、後期道德哲学が展開される『道德と宗教に関する諸断片』を中心に扱いながら、ビランにおける心理学から道德哲学への展開を跡付けるという手法をとる

この研究において重要となるのが、ビランの「共感」概念である。ビランによれば、人間は「共感」によって本質的に関係づけられている。それゆえ、この「共感」こそが自我と他者との関係を論じる道德哲学において基礎となる概念なのである。しかし、ビランにおいて共感とは本質的に本能の一作用であって、それ自体は道德的ではない。それゆえ共感がいかにして道德性の構成に寄与するかが、問題となる。本論文はこの「共感」概念の思想史的背景を踏まえつつ、その根本的な性質を詳細に分析する。さらに本論文で論者は、ミシェル・アンリとの比較を通じて、ビランの共感概念とこれに基づく他者論の可能性を掘り下げて探究する。この探究を通じて論者は、ビランの道德哲学において「共感」が自我と他者の存在論的な基底の役割を果たしていること、並びに、ビランにおける他者論が、アンリのそれと同様に、存在論的基盤としての生命に根差した共同体論を志向していることを示している。

論文の内容

本論文は、全四章からなる。その内、前半2章は、予備的考察として、メヌ・ド・ビランの心理学を分析し、後半2章は彼の後期道德哲学並びに「共感」概念を分析する。

第1章「ビラニズムの諸前提—自我の諸規定」は、ビランの後期道德哲学を論じるに先立って、その前提となっているビランの中期哲学における「心理学」の内実を描き出す。すなわち、「心理学」の対象である能動的自我の実相が、これを描出するための諸概念の分析を通じて描かれるのである。実際に扱われるのは、「原初的事実」、「努力」、「固有身体」、「反省」、「人格」といった諸概念であるが、これらの分析を通じて、彼の心理学の焦点である、能動的な自我、「意識」の基本的な構造、並びに、能動的な存在者としての自我の経験の階層的構造が記述される。また、こうしたビランの記述が、デカルトやコンディヤックが分析するに至らなかった自我の存在様態にも届いていることが示される。

第2章「心理学の方法と学知の基礎」では、メヌ・ド・ビランの心理学の方法論、ならびにそ

の学知としての特性が分析される。論者は二つの方向からビランの心理学を分析する。第一の方向において論者は、この学の実践的な側面に注目し、「混成的な学知」としての心理学を考察する。ここでいう「心理学」は、人間を感性的かつ知性的な「二重の人間」として捉える学知であり、情感的経験を記述しつつ、それを抑制し知的能力を育成する実践的な狙いを持つものである。第二の方向において論者は、「反省的諸観念」に焦点を当てている。これは力、実体、原因、自由など学知の根本概念を自我の実存と結び付けつつ論じるものであり、ビランはこれら諸概念を自我の「原初的事実」と結び付けつつ分析する。論者はミシェル・アンリの解釈を参照し、これら諸概念の「原初的事実」からの演繹を分析し、ビラン心理学の特性を明らかにする。

第3章「メーヌ・ド・ビランの道德哲学」では、道德哲学において「共感」が自我と他者との関係を形成し、道德性の構築に寄与することが論じられる。この議論を通じて、共感が道德性の基礎であることが示される。他方で、共感の普遍性は神の絶対性によって保証されるのであり、その神の絶対性を看取するのは理性である。つまりビランにおいて、道德的普遍性の問題は宗教の問題に還元されるのである。しかし、道德的普遍性を保障する神の看取においても、共感は必要不可欠な要素である。なぜなら、家族的な親愛の情としての共感がないならば、その類比によって感得される宗教的感情はなく、したがって父としての神は理解されないからである。このようにして、共感が他者との関わりの中で構成される道德と、道德性を契機とする宗教の根底に存することが明らかになる。

第4章「共感と生の共同性」では、前章によってその重要性が明らかになった「共感」概念を詳細に分析する。まず、論者はこの概念を巡る思想史的系譜を研究する。共感を道德性の一契機とするビラン道德論の着想はたしかにアダム・スミスの『道德感情論』の影響を思わせるが、しかし論者はそこにソフィー・ド・グルーシー（コンドルセ夫人）、そしてカバニスの影響があることを主張する。次いで、共感による経験とその本質を、「情感」の一樣態として、仔細に分析する。その分析によって、共感が非道德的な性格を有しながらも、しかしそれにゆえに道德的生の構成要素であることが明かされる。最後に論者は、ミシェル・アンリを導き手として、ビランの共感による自我と他者との共同性の特徴と、ビランの他者論、あるいは共同体論の可能性をも探究する。